Japanese Association of Russian Scholars

『白痴』における「死刑囚の顔」とそのヴァリアント

小　林　銀　河

ドストエフスキーの傑作『白痴』の中には死刑囚についての話が出てくる。銃殺刑を言い渡された後，処刑寸前に赦され，減刑になるという鮮烈な体験をした作家が自らの体験を作品中に描いたと言われる有名な場面である。しかし，ともするとこのエピソードの伝記的側面ばかりに目が行ってしまい，それが作品の中で果たす役割が視野から落ちてしまうことがある。ここでは，作家の伝記的事実は考察の対象からひとまず除外し，死刑囚の話が小説の全体構成において持っている重要な意味に目を向けてみたい。

1．死刑囚の顔

小説の最初の部分で，エパンチン将軍家を訪れたムイシキン公爵は死刑囚についての話を二度にわたってする。一度は召使に対して。もう一度は夫人と三人の令嬢の前で。召使に対しては，免れる希望を確実に奪われているという不可避性・確実性の意識の苦しさについて，夫人と令嬢たちに対しては，処刑までに残された5分間に死刑囚の考えたこと，処刑場の光景，死刑執行の日の出来事，といった内容が長々と語られる。

しかしここで見逃せないのは，夫人と令嬢たちの前で話す際，ムイシキンがこの話を絵の題材として語っていることである。絵の才のある次女のアデライーダに対して「1分後にギロチンによる死刑を宣告されている者の顔」を描くことを提案するのである。絵の核になるのは死刑囚の顔であるが，その核心部分についてムイシキンは次のように言う。

> — Это ровно за минуту до смерти, 〈...〉 тот самый момент, когда он поднялся на лесенку и только что ступил на эшафот. Тут он взглянул в мою сторону; я поглядел на его лицо и всё понял... Впрочем, ведь как это рассказать! Мне ужасно бы, ужасно бы хотелось, чтобы вы или кто-нибудь это нарисовал! Лучше бы, если бы вы! 〈...〉
>
> 「それは死のちょうど1分前，〈…〉彼が階段を上がって断頭台の上に足を踏み入

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

れたばかりのちょうどその瞬間です。そこで彼は私のほうへ目を向けたのです。私は彼の顔を見て，すべてを理解しました。しかし，いったいこれをどうやって話せばよいのでしょう。私は，あなたか誰かにそれを描いてもらいたいと，強く強く望むのです！もしあなたならば，うまくやってくれるでしょうに！〈…〉」(8，55)

顔そのものについて具体的な叙述をするわけではなく，「どうやって話せばよいのだろう」という言葉を主人公に吐露させている。一見描写を放棄しているようにも受け取られる表現だが，この表現の持っている積極的な意義を確認しておきたい。

第一に，「どうやって話せばよいのだろう」と嘆く姿それ自体が，ムイシキンの主体的に感じた衝撃の有様を身近に伝達しているということ。4回登場する助詞 «бы» には，強い感動を言葉によって表現できないもどかしさ，そして何とかして表現したいという願いといった，主人公の前のめりの感情が込められている。[1]

第二に，ムイシキンにすべてを語り切らせないことで，かえって読者の想像力が喚起される。不完全に与えられる情報と語り手のもどかしがる姿を拠り所にしつつ，読者は自身の想像力を活用して，この光景をそれぞれに思い描き，その印象を自身の内に再現することだろう。そして，知らず知らずのうちに作品世界の深みに引き込まれてゆくのである。

また「美には，人を沈黙させる力があるのです」という小林秀雄の言葉も想起される。[2] 死刑囚の顔はもちろん「美」と呼べるものではないが，強い印象をもたらすのは確かだ。ここでのムイシキンの語り口を，印象深い光景を前にした際の沈黙が文体に取り込まれたもの，と見ることもできる。

死刑囚についての長い話が絵の題材として持ち出されており，その核には死刑囚の「顔」がある。語られた内容がすべてその「顔」に流れ込み，凝縮されるのである。そして「顔」を取り巻き支える周囲の状況についてはこの作家ならではの饒舌で以て盛んに述べたてておきながら，いざ肝心要の「顔」そのものに至ると，「どうやって話せばよいのだろう」と明言を避ける。俗に「百聞は一見に如かず」と言うが，所詮言葉は本質の周辺を廻ることしかできないのだろうか。核心に至るまでの道は一歩一歩ていねいに跡づけしてくれるが，核心部への最後の一歩だけは導きを与えてくれず，「自分で跳べ」と言う。

しかし，そのようにただ一点導きを放棄された「死刑囚の顔」に，尋常でない意味が込められていることも間違いないと言える。むしろ，作家は「どう

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

やって話せばよいのだろう」と敢えてムイシキンに嘆かせることによって，読者に対する最大の表現効果をねらったと言ったほうが的確だろう。

2．死刑囚の顔のヴァリアント

「死刑囚の顔」のモチーフは作品の初めの部分に置かれているが，実はこのモチーフは作品全体を流れる一つの大きな水脈となってそこここに顔をのぞかせることになる。作品のいたる所，この水源から無言の磁力を蒙るのである。

まず，ナスターシヤの虜になっているロゴージンにとって，彼女の諾否がまさに運命を決するものであることはうなずける。

> ロゴージンは茫然自失し，神のようなものに対するがごとく，しかし死刑を宣告された（**приговоренный к казни**），もう失うべきものが何もない者の大胆さでもって，自らの問いを発した（8，97）。
> それから立ち上がり，ひと言もしゃべらず，自身への宣告（**свой приговор**）を待つかのように手を下ろした（8，135）。

ここでは「死刑囚」が比喩として登場している。「死刑を宣告された者」が比喩として用いられている例はドストエフスキーの他の作品にも見られるが，『白痴』では，初めに死刑囚について十二分に述べられ，その強く重い印象が読者の内に揺るぎなく植えつけられているが故に，後から用いられる「死刑を宣告された者」の比喩はいずれも大本の揺るぎない印象の記憶によって後押しされ，堅固に響き合い，比喩としての想像喚起力が著しく強まっている。

次に，肺病で余命いくばくもない少年イポリートだが，この少年の不治の病はそれ自体一つの「死刑宣告」と言えよう。

> 「読む！」イポリートはまるで運命の決定に押しひしがれたかのようにささやいた。もし死刑が言い渡されたとしても（**если б ему прочли смертный приговор**），彼はこれ以上蒼くはならなかったであろう（8，319）。

上に掲げたのは，彼が自殺を覚悟して書き上げた『弁明 **Объяснение**』を読むか否かを決するためにコイン投げをした結果「読む」と決まった場面だが，ここに「死刑宣告」という言葉がある。彼が読み上げる『弁明』の中にも，自分自身を死刑宣告を受けた者になぞらえている姿が垣間見られる。

さらにこの弁明ではホルバインの絵『死んだキリスト』について言及される。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

確かにこれは，たった今十字架から下ろされたばかりの，すなわちたいへん多くの生きた温かいものを内に保っている人間の顔でした。硬化しているところはまだ何もないので，死者の顔の上にはあたかも今まだ感じられているかのような苦痛が見えさえしました（それは芸術家によってとてもよく捉えられている）。しかしそのかわり，顔はまったく容赦のないものでした。そこにあるのは自然だけで，このような苦しみの後では，誰であっても，人間の死体は真実こうであるにちがいありません（8，339）。（傍点は原文の強調）

絵の眼目は苦痛に苛まれたキリストの「顔」である。そしてこの絵を見たときの印象をイポリートは次のように記している。

そのとき思わず，もし自然がこれほど恐ろしく，自然の法則がこれほど強いものだとしたらどうやってそれを克服できようか，という考えが浮かんだのです。存命中に自然に打ち勝ち，自然を従え，「タリタ・クミ」と呼べば少女が起き上がり，「ラザロよ出ておいで」と言うと死んだ者が出てきたという人でさえもはや克服できないとしたら，どうやってそれを克服できようか。この絵を見ると，自然は何か巨大な物言わぬ獣の姿か，あるいはもっと正しく言えば，奇妙かも知れないが，すべての自然とすべての自然法則と地上全体に値する唯一の存在，この地上はただその存在の出現のためだけに創られたであろう偉大でこの上ない存在を，意味もなくつかみ取り，切り刻み，音もなく無感動に飲み込んでしまう何かの最新設計の巨大な機械（**какая-нибудь громадная машина новейшего устройства**）の姿をして現れるのです！すべてがそれに従い，知らず知らずのうちに我々に与えられる暗いずうずうしい無意味な永遠の力についての考えが，この絵によってまさに表現されているかのようです（8，339）。

ここではキリストへの信仰を脅かすものとして「自然」が捉えられている。この部分は作家の思想を読み取るうえでも大変重要な場面だが，ここでは特に「巨大な機械」という比喩が，やはり冷徹な機械であるギロチン装置を連想させることを指摘しておきたい。「自然」というものは，言わば人間の精神に下された巨大な死刑宣告なのである。

物語の初めにムイシキン公爵が語る死刑囚の話はしばしばそれだけ切り離して作家自身の伝記と絡めて論じられる。無論それは一つの重要な観点ではあるが，「また，死刑の恐怖について，場違いではある（irrelevant）が生き生きとした描写が二箇所ある」「作者は自分の深刻な体験を，ここで存分に表現しようとした，たとえそれが小説の均衡を打破ってもそうせずにはおれなかったの

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

である」[3] とまで言ってしまうのは，不用意と思われる。これまで見てきたことから明らかなように，死刑囚の話，特にその「顔」は無言の磁力，巨大な地下水脈となって，全編を通して所々に少なからぬ影響を与えている。それはロゴージンやイポリートの顔，肉体の苦痛に歪んだキリストの顔であり，さらに信仰という希望の拠り所を失いつつある近代人の魂の表情でもある。自身のどうにもならぬ性情や運命という名の目に見えぬ力にもてあそばれ，悲劇へ，そして破局へと向かって流されてゆくこの物語の主人公たちも，ある意味で刑を宣告された者たちなのかも知れない。

最後にナスターシヤ・フィリッポヴナについて。ナスターシヤは顔が印象的に描かれている主人公である。彼女の容貌はムイシキンの目を通して語られ，その描写はやはりよく引用されるものだが，ここではムイシキンが彼女に言ったある言葉に注目したい。

> 私は先ほどあなたの写真を見まして，まさにどこかで見た顔（знакомое лицо）だと分かりました。私にはすぐに，まるであなたがすでに私を呼んでいたように思えて……（8，142）

「どこかで見た顔」とはどんな顔であろうか。これについては様々な解釈が可能だろう。例えば，研究者D．P．スラッテリーはスイスでの思い出話の中に出てきた薄幸の娘マリーの顔をナスターシヤの顔に重ねている。[4] また作田啓一は病理的傾向を持つ「既視感」であると説明している。[5] それぞれそれなりに根拠がある見解だが，私はここでは，他でもない死刑囚の顔をナスターシヤの顔に重ねたいと思う。その根拠としては，「ナスターシヤ・フィリッポヴナの声は，すでに見た如く，自分を罪深い《堕落した女》とみなしている声と，自分には罪がないとして受け入れようとする声とに分裂した。このふたつの声のぎくしゃくした絡み合いに彼女の言葉は満たされている」というバフチンの説明を援用したい。[6] 彼女の意識の中ではこの世に望みをつないでゆきたいという希望と，破壊的な自暴自棄に走ろうとする衝動との二つが激しく葛藤している。この葛藤は彼女の肖像写真の描写からも読み取ることができる。そして生きたいという希望に対して，自分で自分の運命を滅茶苦茶にしようとする破壊衝動は一種の死刑判決と見ることができる。それも自分が自分に下す死刑判決である。他人がではなく，自らが自分自身に死刑を言い渡すところに彼女の不幸がある。しかも一方では自分を無垢だと言ってくれるムイシキンのような

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

者を待ち望み，従順に生きてゆきたい希望もあり，そこで苦しむ。彼女の顔はまさに死刑囚の顔なのである。ムイシキンが最後まで苦しめられるのは彼女の「顔」のもたらす印象である。

作品の終わり近く，ナスターシヤとアグラーヤの対面の場面では，憎悪に満ちた対話が次第に激してゆき，ついにナスターシヤがムイシキンに狂ったような視線を注ぎ，公爵が一瞬の躊躇を見せたがためにアグラーヤは飛び出してゆくわけだが，その時のナスターシヤの顔は次のように書かれている。

> 彼は目の前にただ，絶望的な狂ったような顔を見た。彼がかつてアグラーヤに「永遠に心を貫かれた」と語った顔である(8，474-475)。

この顔が決定的な効果をもたらすわけだが，その顔をここに書かれた簡単な言葉のみに拠って思い描くのにとどまっては決して十分とは言えないだろう。すなわち，ここに「処刑寸前の死刑囚の顔」を重ねるのである。

3．作品の主題と顔の表情

『白痴』は作者自身が「完全に美しい人間を描こうとしたもの」だと明かしている。[7] しかし，作品全体に散りばめられている様々な死の形象をたどってゆくと，人間の「生と死」について描いたものだという見方も可能であり，そのことに触れている先行研究もある。[8] 「死刑囚の顔」というテーマとその様々なヴァリアントは，人間を苦しめる死の感覚の様々な姿を視覚的印象を通して顕現してくれるのである。「生と死」という作品の重要主題を理解するうえで，これらの顔の表情は欠かせない題材となっている。その意味で，『白痴』は「顔の表情の小説」として読むことができるのである。

(こばやし　ぎんが・東京大学 DC)

注

ドストエフスキーのテキストは *Достоевский, Ф. М.* **Полн. собр. соч.: В 30 т. Л.: Наука, 1972-1990. Т. 1-30** により，(　) 内に巻号と頁数を記す。訳は小林による。木村浩訳『白痴』上・下〈新潮文庫〉，1970を参考にした。

1　ドストエフスキーの他の作品や書簡における同様の仮定法表現については，小林銀河「ドストエフスキーにおける『仮定法』についての一考察」，『ドストエーフスキイ広場』5 (1996)：30-36を参照。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

2 小林秀雄「美を求める心」,『小林秀雄集』(近代日本思想体系29), 筑摩書房, 1977, 388.

3 Carr, E. H. *Dostoevsky. 1821-1881.* London: George Allen & Unwin, 1931. 204; 加賀乙彦『ドストエフスキイ』〈中公新書〉, 1973, 26.

4 Slattery, D. P. *The Idiot. Dostoevsky's Fantastic Prince: A Phenomenological Approach.* New York: Peter Lang, 1983. 51.

5 作田啓一『ドストエフスキーの世界』筑摩書房, 1988, 95-97.

6 M.バフチン『ドストエフスキイ論』新谷敬三郎訳, 冬樹社, 1968, 377.

7 **«вполне прекрасный человек»** (1867年12月31日, A.H.マイコフ宛の書簡), **«положительно прекрасный человек»** (1868年1月1日, C.A.イヴァーノヴァ宛の書簡) という言葉が使われている (28-2, 241, 251)。

8 新谷敬三郎『「白痴」を読む』白水社, 1979, 35-36; 中村健之介『ドストエフスキー——生と死の感覚』岩波書店, 1984, 93-94を参照。

Гинга КОБАЯСИ

ЛИЦО ПРИГОВОРЕННОГО К СМЕРТНОЙ КАЗНИ И ЕГО РАЗНОВИДНОСТИ В РОМАНЕ «ИДИОТ»

Общеизвестно мнение, что, когда Достоевский описывал приговоренного к смертной казни в романе «Идиоте», он ориентировался на собственный опыт. В этой работе мы рассматриваем роль этого эпизода во всей структуре романа, безотносительно к биографии автора.

В первой части романа Мышкин, находясь у Епанчиных, долго рассказывает о приговоренном к смерти, например об ужасе сознания того, что никак невозможно спастись, о конкретном зрелище около эшафота, о том, что происходит в сознании преступника до совершения казни, и т.д. Но эти разговоры окончательно сводятся к сюжету картины для Аделаиды. Самый главный, центральный аспект картины — лицо казненного по смертному приговору. Все прежние и последующие разговоры ведутся вокруг описания одного этого лица.

Выражение этого лица производит сильное и тяжелое впечатление на читателя. Об этом лице Мышкин сказал: «Я поглядел на его лицо и все понял... Впрочем, ведь как это рассказать!» Но нельзя считать эти слова отказом от описания лица. Во-первых, они передают шок, испытанный героем.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

Во-вторых, то, что Мышкин рассказал не все, напротив, еще больше усиливает воображение читателей. Кроме того, можно сказать, что и молчание, вызванное сильным впечатлением, внесено в этот стиль. Мышкин сетует на неспособность рассказать об этом лице — и это создает самый большой эффект.

Портрет приговоренного к смерти в действительности продолжает оказывать подспудное, но сильное влияние на весь роман. Сходное выражение появляется на лицах некоторых других героев в следующих сценах и усиливает впечатление. Рогожин охвачен болезненно сильной страстью к Настасье Филипповне. Поэтому ее реакция для него равна приговору. Ипполит, страдающий неизлечимой болезнью, является точно приговоренным к смерти. В картине Гольбейна «Мертвый Христос» зрители чувствуют сильную и беспощадную силу природы. Лицо Христа на этой картине может лишить людей веры в его воскресение. Им кажется, что никак нельзя победить силу природы, которая сравнивается с «какой-нибудь громадной машиной новейшего устройства». Лицо Настасьи Филипповны также производит большое впечатление на читателей. Оно часто становится предметом изображения. В ее сознании сталкиваются два импульса. Она хочет жить, считая себя невинной, и в то же время ей хочется погубить свою судьбу. Этот последний импульс означает смертную казнь, к которой она сама себя приговорила. Можно считать, что «знакомое лицо», о котором говорит Мышкин — это лицо приговоренного к смерти, о котором нельзя не вспомнить, глядя на лицо Настасьи Филипповны. Описания этих лиц героев на фоне лица приговоренного к смертной казни создают атмосферу романа.

Об этом романе автор писал, что он хотел изобразить «положительно прекрасного человека». Но имея в виду образы смерти, рассыпанные по всему роману, тоже можно сказать, что он написан о «жизни и смерти». Мотив выражения лица приговоренного к смертной казни и его различные разновидности связаны с различными ощущениями смерти, и в этом смысле возможен вариант прочтения «Идиота» как «романа выражения лица».

NII-Electronic Library Service